

令和6年度 学校自己評価書・学校関係者評価書

重点目標		評価項目と具体的な手立て	到達度のわかる目標(指標)	達成状況	成果○と課題▲	協議会委員からの意見感想等	今後の改善点
鈴鹿市立鼓ヶ浦小学校		学校教育目標 「知・徳・体 調和のとれた学校」 めざす学校像 「学校が楽しい、明日も来たい」と思える学校 めざす子ども像 (1) 自分も他者も大切にする子 「心豊かな子」 (2) 自ら学び、考えて行動する子 「学ぶ子」 (3) 地域に愛着と誇りを持つ子 「鼓の子」					
(確かな学力を育むICT活用)	学力向上の推進 ・学力向上の核となる児童を中心に据えた授業スタイルを構築する。	・全国学力・学習状況調査やみえスタディチェックにおいて、全国平均や県平均以上をめざす。 →国比較 6年生:算+4.6、国-11.7 →県比較 5年生:算-3.4、国-3.0、理科-7.0 4年生:算-2.7、国+9.7	B	○昨年度、ICT機器の活用を積極的に行ったおかげで、情報の扱い方に関する事項については正答率も高くなっていた。 ○説明するという点に課題があるため、普段の授業の中でも、理由や手順などを説明する活動を取り入れることを意識した。 ▲国語・算数ともに文章をじっくり読み取り、内容やその構成について理解することが難しい児童が多い。 ▲条件に合わせて書くということも苦手としている児童が非常に多い。	・新しい教育機器の導入と先生方の事前準備など、授業への取組と努力の結果を評価したい。 ・文章問題そのものの理解が難しい様子が見られる。宿題の中に出てくる記述式の問題は、答えがズレていることが多く、質問の意図が理解できていないように思います。自分の意見や考えを述べることに焦点をあてるのもよいと思うが、質問の意図を汲み取る授業などあれば、理解が深まるのではないかと思います。 ・家庭学習の仕方について、子どもたちが把握しきれていないようです。また、家庭の状況により、ノーメディアや家庭学習の実施が変わってくると思います。「親ありき」で家庭学習が考えられているように感じられます。子どもが自分で行えるような家庭学習の取組をしてほしいです。 ・授業中、文章問題など、しっかりと問題文を読んでいないのは、と思うことがあります。また、手遊びなどして、先生の話を聞いているのか心配で声をかけると一応やめる。 ・授業での待ち時間が長く、早くできる子は手持ち無沙汰になって余計なことをしているという声が聞かれました。早くできた子が有効的に時間を使える工夫をしてほしいです。	◆引き続きICT機器を活用しつつ、ICT機器の活用が目的になってしまわないように、子どもたちの実態に合わせた教材研究を続けていく。 ◆それぞれの学年での取り組みを共有する機会を増やすことで、授業改善の幅を広げていく。 ◆教科書に沿った授業ばかりではなく、授業の中でも長文問題や難解な文章問題への取り組み方について扱っていく。	
	学習規律の確立 ・主体的・対話的で深い学びがある授業を確立する。	・「授業中しっかりと話を聞き、積極的に考えようとしている」と答えた児童の割合80%以上) →87.2%	A	○発問や課題提示の工夫をしたことで見通しや興味を持ち自ら考えようとする児童が多くみられた。 ○教室掲示の「話すとき」「きくとき」のめあてを基に、よい話し手・聞き手をほめたことで意識を継続させられた。 ○ペア活動・グループ活動に取り組みさせたことで自分の考えを持てたり考えを広げたりできた児童も多かった。 ▲全体交流の場では発言する児童に偏りがみられ、学級全体で学びを深めるには至っていない。	・本をあまり読まない子は、本を選ぶことが難しいと思うので、「こんなところがおもしろいよ」と本の紹介を、本を読んだ子自身が他の子にする機会があれば興味を持っていないでしょうか。 ・家庭での親子の対話が少なくなっているのではないかと。生活習慣として、目くばりも子どもにしてやってほしい。	◆年度初めに「話し方・聞き方」の指導事項を全教職員と共有し、児童への指導を徹底する。よい話し方・聞き方を褒め、価値づけることで継続させられるよう意識する。 ◆早く自分の考えをまとめた児童には、相手に分かりやすい伝え方を考える、補充問題に取り組む、ミニ先生として手助けをする等の課題や役割を与え、主体的に学習に取り組めるようにする。	
	家庭学習の習慣化 ・その子に合うステップアップ学習の推進と、家庭学習・生活読書強化週間の定着を図る。	・「お子さんは学校から配付した「家庭学習の手引き」に沿って、家庭学習を進めている」と答えた保護者の割合80%以上。 →75.0%	B	○家庭でも一緒に本を読んだり読み聞かせをしたり、家族でメディアの時間を減らしたりしていただくよい機会になった。 ○平日の平均学習時間は学年ごとの目標時間を上回っている学年がほとんどであった。 ▲読書時間にばらつきがあり、全校平均は1日に約20分であった。 ▲どの学年も土日の学習時間は平日よりも大きく減少しており、中には土日の学習時間が0の児童もいた。	・本をあまり読まない子は、本を選ぶことが難しいと思うので、「こんなところがおもしろいよ」と本の紹介を、本を読んだ子自身が他の子にする機会があれば興味を持っていないでしょうか。 ・家庭での親子の対話が少なくなっているのではないかと。生活習慣として、目くばりも子どもにしてやってほしい。	◆現在、保護者向けの家庭学習の取り組み方についての文書は全校統一で出しているが、児童向けのものは配付されていない。児童向けのものの作成を検討していく。 ◆家庭学習強化週間やノーメディア週間の意義やねらいなどの児童への指導をさらにしっかり行い、子どもたち自身に意識づけをしていく。 ◆図書館司書を活用し、ブックトークなどどんな本があるのかを知る取り組みも増やしていく。	
	授業の中での活用 ・ICTを効果的に活用し、学習意欲を高めるとともに、学力の定着を図る。	・授業の中で1日1回はICT機器を活用する。	A	○ICT支援員が授業に入ったり、ミニ研修会を実施したり、効果的な活用ができた。 ○ICT支援員から提案していただいた授業実践案などを活用した授業をおこなった。ICT機器を活用すると、意欲的に取り組む姿がみられる。 ▲授業において、端末使用のルールや情報モラル等の学習が必要である。	・クロムの利用はとても大切で、子どもたちもうまく活用して、使いこなしているので関心している。一方でトラブルがあったりしたので、ルールやモラルの指導を行う必要があると思う。クロムからYouTubeが見れたりするので、制限できないのかと思う。 ・クロムを持ち帰ることでできる学習が増え、よい点もあるが、おもちやになっていることも多い。使用のルールについて、学校でも徹底的に周知してほしいです。 ・スマホやタブレットを持っている子が多くなっているので、実際に起こった事件やトラブルなどを例に、ネットの怖さや安全な使い方など、学校からも伝えてほしい。	◆ICT支援員と連携し、端末の効果的な活用および端末を活用した授業づくりに取り組むとともに、情報教育担当を中心に、他校の実践や活用方法などを共有し、授業に取り入れていく。 ◆情報モラル(ルールやマナー等)の指導を行うとともに、端末の取り扱いについて、学校と家庭で連携していく。	
	個に応じた学習 ・ICT機器に親しみながら個に応じた学習することで学力を向上させる。	・高学年は家庭への持ち帰りを毎日行い、低学年では週に2回以上行う。	A	○昨年度に引き続き、持ち帰り家庭学習ができている。家庭学習の内容も、ICTならではのものや積み重ねて入力していくものなど各学年が工夫している。 ○複線型授業の実施に向けて校内研修をおこなった。 ▲個に応じた内容として課題をすることは少ない。ICTを用いてどのような課題を与えるか考えていく必要がある。	・時々、高学年と思われる児童3~4人が公園のベンチで教科書、ノートを開けて、話し合っている姿を見かけるが、放課後の対応も地域ぐるみの課題かと思う。	◆端末を活用した家庭学習の内容について、研修部を中心に見直ししていく。 ◆本年度に引き続き、複線型授業の研修および実践に取り組んでいく。	
(不登校対策)	安心できる学校づくり ・安心できる居場所のある集団づくりに取り組む。	・「学校で勉強したり、友だちと遊んだりすることが楽しい」と答えた児童の割合80%以上) →94.9%	A	○日頃より全職員(すべての職員)で子どもを見守り、情報共有を行うことでトラブル等に対して素早く対応ができた。 ○スクールライフサポーターやスクールカウンセラー、行政、医療機関等とも連携しながら、教育相談や登校支援を行えた。	・不登校児童の状況は？ ・先生(担任以外でも)全員で、また地域の方々みんなで子どもを見守ってもらっている印象がある。 ・生徒どうしだけでなく、先生と児童はどうなのでしょう。子ども対象だけでは意味がないと思います。	◆今年度同様、SLSやSC、SSW、行政、医療機関等と連携しながら、教育相談や登校支援を行う。	
	いじめのない学校づくり ・いじめの未然防止と早期発見・即時対応に努める。	・「学校は、いじめを許さない仲間づくりに努めていますか」と答えた保護者の割合(80%以上) →92.4%	A	○いじめアンケート実施後に丁寧に事象を聞き取り、子どもたちの不安を取り除くとともに、いじめ対策委員会を開催し学校全体として取り組むことができた。日頃より全職員(すべての職員)で子どもの様子を丁寧に見、情報共有することで未然防止に努めることができた。 ○児童会が中心となり、ピンクシャツ運動を行った。学級でいじめをなくすために自分はどうするか話し合い、意識をもって取り組むことができた。	・いじめの実態は？ ・目標を達成するための取組をしていることで評価するのもいいが、実際に不登校児童数やいじめ件数の数値で評価してはどうか。 ・最近、子どもたちと通学していて、いじめの話が聞かなくなった。以前は休んでいた子どももいましたが、今は何も聞きません。先生方の配慮が行き届いているように感じています。 ・地域での子どもの遊び場で、いじめは見受けるところはない。	◆日頃から、全職員で児童の様子を見守るとともに、職員会議等で情報共有を行う。 ◆いじめ防止等対策委員会を年度初めに立ち上げ、各学期に実施しているアンケート後に丁寧に聞き取りをして、早期対応・早期解決に努める。	

り	道徳性・人権意識の育成 ・特別な支援が必要な子を核とする人権教育を推進する。	・一人ひとりの違いに寄り沿った学習支援のあり方を研究するとともに、個別の支援計画を作成・見直しを図る。(支援会議等を年回6回以上開催)	A ○必要に応じて児童支援会を開き、個に応じた支援について協議することができた。また、関係機関等とも連携を図ることができた。 ○毎回の職員会議後に子ども理解会議を設定し、個々の特性を理解した適切な指導について全職員で考え、かかわり方等の共通理解を図っている。 ○授業参観で人権の授業を行い、保護者や地域の方に取り組みをみていただいた。	・人権問題の取組は、校区人権フォーラムに参加する機会があり、児童生徒は課題を理解し、討議していた。全校児童生徒への水平展開も期待できる。	◆今後も個に応じた支援をし、職員の共通理解を図っていく。 ◆1年生から6年生まで、発達段階に応じた取組を考えていく。
豊かな心を育む教育活動 (非認知能力の育成)	非認知能力の育成① ・「やりぬく力」「自制心」「自己肯定感」「社会性」を重点的要素とし、様々な教育活動に取り組む。	・巡回図書支援員による非認知能力を育むブックトーク(各学年1回以上) ・重点的要素の育成を意識した体験活動(各学年1回以上)	B ○全学年でのブックトークは1月に完了予定。 ▲ブックトークだけでなく日頃の授業などでも巡回図書支援員をもっと活用できるとよい。 ▲重点的要素の育成を意識した授業展開や体験活動はできていない。意識せずとも行っているものはある。 ▲本校児童の実態とつきたい力を明確にし、全職員が共通理解のもと、具体的にどのような取組をしていくのか、年度当初に確認が必要である。	・到達のわかる目標(指標)にはありませんが、縦割りの活動により役割が持て、高学年は低学年を思いやる気持ち、低学年は役に立つ経験が学べると思います。それは集団登校などでも同じような効果があると思います。 ・これからの社会で、非認知能力は重要になると思うので、ぜひ積極的に取り組んでほしい。	◆年度当初に、本校児童の実態とつきたい力を明確にし、全職員が共通理解のもと、非認知能力の育成に取り組んでいく。 ◆巡回図書支援員や読み聞かせボランティアによる非認知能力を育むためのブックトークや読み聞かせを行う。
	非認知能力の育成② ・「非認知能力の育成」のための校内研修を実施するとともに、アンケートを実施する。	・校内研修の実施(年間1回以上) ・アンケートの実施(前年度との比較)または(否定的回答割合10%未満)	B ○年度初めに指導主事を招聘し研修会を開催し、「非認知能力とはどのようなものか」「どのような場面で育成できるか」等疑問に思うことを出し、答えてもらうことで共通理解をもって取り組むことができた。 ▲アンケートの5・6年生の経年変化を見ると、4つの項目すべてにおいて平均値が下がり、否定的回答割合が上がった。小規模校であることを活かし、個々の児童について分析していく。	・個人個人の非認知能力の定量化(見える化)を検討いただき、数値目標を立てていただくことを希望します。	◆非認知能力の育成に関わる校内研修を実施する。 ◆アンケートの結果については、個々の児童について分析することで、個に応じた対応をしていく。
開かれた学校づくり (地域連携)	地域連携・地域ぐるみの教育 ・地域人材を活用したキャリア教育を推進する。	・児童アンケートで、「将来の夢ややりたいことがある」と答えた児童の割合80%以上 →80.3%	A ○授業の中で日常的に地域のボランティアの方々力を借りて教育活動を行っている。 ○家庭科の裁縫や調理実習・図工の電動ノコギリの学習などの活動で熟練のボランティアの方々に協力してもらうことで、子どもたちがより生き生きと活動でき、それらの教科を好きになることができている。 ▲目標値の80%は超えているものの、昨年度の82.7%よりも下回っており、キャリア教育の工夫が必要。 ▲地域の人の得意分野を生かせる活動を模索していきたい。	・調理実習など、子どもたちが班で話し合っスムーズに調理ができています。試食のときには、ボランティアさんの席を用意して、楽しく食べている。 ・ボランティアと子どもたちの関係がよいことをうれしく思います。子育てのプロのボランティアさんに感謝です。 ・校区内で、元教育関係者など、学習支援ボランティアができる方が他にもいるので、回覧などを通してボランティアを増やすことはできないでしょうか。 ・土曜学習の中で、いろいろな工具を経験させています。危ないと言って使わせないことは、逆にケガにつながる気がします。今後もいろいろな道具を使う経験は必要だと思います。 ・公民館事業の土曜体験学習で、参加児童は生き生きと取り組んでいる。生活習慣も学んでくれればと実践させている。 ・課外授業への養成があれば、積極的に協力したい思っている。 ・この地域出身の有識者の講話や夢をテーマに子どもたちに話ができる機会を与えてあげたい。 ・地域の人の力や地域性を活かして、いろいろな体験を通して、自分の好きなことや興味のあることを見つけたい。(砂の造形活動を復活してほしいという声をいただいた)	◆授業に入っていたらボランティアさんと子どもたちはとてもいい関係ができているように感じる。この関係を活用していくためにも、その年ごとにどの学年でどのような形でボランティアさんに協力していただいたのか、記録を残し共有することで、来年度以降に生かしていく。 ◆CS担当と地域コーディネーターが連携を図り、より効果的に学習支援ボランティアさんに支援していただけるよう、連絡・調整を行う。
	児童の自主的な活動 ・笑顔であいさつができる子どもの育成をめざす。	・「地域の人や家族、友だちや先生にあいさつをしている」と答えた児童の割合80%以上 →92.3%	A ○昨年度より5.8%高くなった。 ○児童会活動の一つとして「あいさつ運動」を各学期に1回実施することができた。 ▲地域の方からは、あいさつができる児童もいれば、あいさつができない児童もいるとの報告があり、誰にでもあいさつができるよう指導していく必要がある。	・「あいさつ運動」は高学年があいさつできる班は比較的あいさつできる子が多いと感じます。こちらも顔を見てあいさつするよう心がけています。 ・あいさつをする意味、それが与える影響を、子どもたちが理解できていないからあいさつしない、したくない子がいるのではないかと。思春期の子たちもいるので難しいとは思いますが。 ・私の知るかぎり、あいさつはよくできています。あまり知らない子どもは照れくさいかと思えます。 ・地域の人へのあいさつ92.3%は子どもを見守る人との意識の差が大きい。子どもの判断基準は何か知りたい。	◆日々、地域の方々に見守りやあいさつをしていただくことで、子どもたちのあいさつの意識も育ってきているように感じる。子どもたちが進んであいさつができるよう、来年度も児童会を中心に年3回のあいさつ運動を実施するとともに、あいさつの意義等の指導を行っていく。
安全安心な学校づくり	防災避難訓練や安全教育等の実施 ・鈴鹿署や教育支援課と連携しながら、年間計画に則って防災教育や安全教育を実施する。	・保護者や地域住民参加型の避難訓練や防災学習会等を実施する。(年3回) ・鈴鹿署や教育支援課と連携して、交通安全や万引き防止、不審者対応、ネットモラル、薬物乱用防止教室等を開催する。(年3回以上)	A ○予定された避難訓練、交通安全教室等を実施することができた。また、本年度、休み時間の避難訓練を実施する予定である。(3月) ○鈴鹿署、教育委員会との連携により、子どもの実態に応じた安全教育を実施することができた。 ▲津波警報の際の避難について、見直しが必要である。また、それに伴い垂直避難の訓練も検討していきたい。 ▲地域の方の得意分野が生きる活動を進めていきたい。 ▲来年度以降の実施については、内容が重複しないような工夫が必要である。	・津波避難訓練は難しい地域だと思います。稲生小への避難は川に沿って、遠すぎるのではないかと。 ・津波避難訓練については、本当に稲生小で安全なのか、現実的にそこまでとり着けるのか…、検討してほしい。 ・避難訓練に関しては、自治体とも連携して実施していくことも重要ではないかと思えます。 ・地域の人たちと一緒にできる避難訓練(小学校の屋上など)を実施してはどうか。 ・H27年頃、子どもと親、地域の人たちで災害時のサバイバル料理を、小学校の運動場で行っていたと聞いた。まち協としても、再開してみてもどうかと考えているので、ご協力願います。 ・地域の人たちの安全安心、防災意識も低下しているのでは。自治会をはじめ、大人がしっかりしないといけない。	◆市の防災危機管理課等の有識者を交え、津波避難訓練の実施方法や津波警報が発令されたときの避難そのものについて検討していく。 ◆屋上への避難(垂直避難)について、段階的に実施していく。 ◆子どもたちの防災意識を高め、より緊張感のある避難訓練になるよう、防災学習に取り組んでいく。

Aー達成(関連児童・保護者アンケート項目の結果が80%以上の項目)
 Bー未達成(関連児童・保護者アンケート項目の結果が50%以上80%未満の項目)
 Cー課題あり(関連児童・保護者アンケート項目の結果が50%未満の項目)